

月刊

いじろのとも

第十一卷

一月号

和を取り戻そう

日本古来の

人と人が関わる原理の

和を

取り戻そう

権利も義務も

言わなくても

よくなるから

どくつく三歳児

三歳児

親にどくつき

唾をはく

どうなってるの

親のしつけは

人生を考え直して

みたい人は（七二）

『正法眼蔵』解説（一六）

現成公案の巻を先月号で終わりました。『正法眼蔵』解説を続けようか、それとももう止めようか、でも、続けるとすれば、どの巻にしようか、などという迷ったのですが、結局、「有時（うじ）の巻」を取り上げることにしました。理由は、次のようなものです。

かつて、私が自分の時間論を構築しました時、参考に読んだ本である、長尾雅人・中村元監修 三枝充恵編集『講座仏教思想第一巻 存在論 時間論』（理想社刊）の中に、玉城康四郎著の「道元の時間論」がありました。その中でこの「有時の巻」が取り上げられていたのですが、それは、道元が言っていることの単なる繰り返しに過ぎず、理解を深めているとは、とても言いがたいことをその時知ったのです。つまり、この巻も「現成公案」と同様に、きわめて哲学的で難解なのです。それは、どの現代語訳を読んでも、どの解説書を読んでも、正しく解釈している本がないことから分かります。ですから、「有時（うじ）」を、私が、解説しておく価値があると

思えるからなのです。

前置きはこのぐらいいにして、本文に入ります。

有時

古仏言

有事高高峰頂立

有時深深海底行

有時三頭八臂

有時丈六八尺

有時 杖扠子

有時露柱灯笼

有時張三李四

有時大地虚空

いわゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。丈六金身（じょうろくこんじん）これ時なり、時なるがゆえに時の莊嚴（しょうごん）光明あり。

いまの十二時に習学すべし。三頭八臂これ時なり、時なるがゆえに、いまの十二時に一如なるべし。十二時の長遠短促、いまだ度量せずといへども、これを十二時といふ。

現代語訳を、参考までに玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵1』(大蔵出版刊)からとり、紹介しておきます。

古仏がいう、

「有時は、高々たる峰頂(ほうちよう)に立つ。

有時は、深々たる海底に行く。

有時は、三頭(さんず)八臂(はつぴ)。

有時は、丈六八尺。

有時は、杖払子(しゅじようほつす)。

有時は、露柱(るちゆう)灯籠。

有時は、張三季四(ちようさんりし)。

有時は、大地虚空」と。

いわゆる有時とは、時がそのまま存在であり、存在がごとく時である、ということである。一丈六尺の黄金の仏身は、すなわち時である。時であるからこそ、時のおのずから輝(かがや)きわたる光明がある。

そのことを、その時その時つねに学ぶべきである。不動明王の三つの頭、八つの臂(うで)(いわゆる憤怒の相)、これすなわち時である。時であるからこそ、現在のその時その時に一体になっている、その時その時の時間は、その長短について測ってはいなくとも、これを十二時という。

古仏のことはを除きますと、道元自身のことばは、ここの紹介部分は、とても短いのですが、でも深遠な内容を含んでいます。ここの部分が理解できれば、次回からは大体理解できるように思えます。

まず、疑問に思われますのは、「有時」と「時」とはどう違うのか、という点です。また「有」とは何なのか、という問題もあります。それが時と一緒にあったのが、有時ということですから。

これらは、どんな意味なのでしょう。ここが、ほとんどの解説者に分かっていないように思えるのです。曹洞宗の教学の最高の地位にある人の解説を読んでも、この心境を理解していないように思えます。因みに、有時の「有」の訳語を見ましても、「ある」と訳しているものや「現象」と訳しているものまで、様々です。

ここで現代語訳を採用しました玉城氏は、前述の論文の中で、有時を「存在即時間」としています。でも、なぜそう訳するのか、つまり、存在が、なぜ、即時間なのかがよく分かりません。形式論理では、存在は存在で、時間ではありませんし、時間は時間で、存在ではありません。それが、なぜ、即で結ばれうるのか、道元の敷き書きで、理由も論理も示されていないように思えます。

まずはじめに、道元を理解するための私の時間論を述

べていきます。

この世に存在するものは、「物質」と「生命」と「精神（人間）」で、この順に進化してきました。

この存在の中で、時間が問題となりますのは、人間だけなのです。物質にはもちろん、時間は問題になりません。また、生命の中でも人間以外の高等動物では問題になりそうですが、そうではありません。

私たち人間に進化してはじめて時間が問題になりだしたのです。それは、私たち人間になってはじめて精神が矛盾的な二重性を帯びるようになったからなのです。

その二重性が、典型的に意識に反映したものが、もつと生き延びたいと思うのに、死ななければならぬ、という苦しみなのです。自分をどこまでも肯定したいのに、何者かによって自分が否定されて行くということです。物質も生命も同様に、その存在を超えたものによって否定されるのですが、そのことを意識できるのは人間だけだということです。そこに苦しみが生れます。

この自分をどこまでも肯定しようとする働きを、私は「自己」と呼び、この、自分の思いどおりにしようとする肯定の働きに否定的に関わる働きを「他己」と呼んでいるのです。

私たちは未来に向かって、ああしよう、こうしよう、

ああなりたい、こうなりたい、と無限に夢を見、理想を描くことができます。でも、現実にはたくさん制約があります。そのもつとも大きな要因は、他者の存在なのです。先ほどの例で言いますと、それは、絶対他者と呼べる自分を死へと誘うものの存在です。もつと具体的なもので言いますと、制度であり、伝統であり、文化・文明であり、法律であるわけです。

実は、こうしたものは、これまでに、人間がなしてきた行為であり、人間にふりかかってきたさまざまな現象なのです。それを、私は過去と呼んでいます。ですから、「他己」が「過去」であり、先ほどの「自己」の理想をもつ働きが「未来」なのです。

ここでいう、過去や未来は、時計で測れる単なる客観的な時間の流れではありません。どこまでも人間のこころの働きとしての過去であり、未来なのです。それらは、人間の精神が作りだす働きです。人間以外の物質や生命では、過去も未来も問題にならないのです。ただ、時間が客観的に流れていますが、それが、自分の存在にとつてどんな意味をもつか、問題にならないのです。

時間を構成する働きでもう一つ残っていますのは、現在です。では、現在とは何なのでしょう。

前述のように、私たちは矛盾的に精神の二重性をもつ

ことで人間に進化しました。端的に言いますと生（有）と死（無）の二重性です。私たちは、この二重性の矛盾の故に、この矛盾を克服しようとして苦しむわけです。ヘーゲルという哲学者にちなんで言いますと、人生は、有と無の弁証法的運動としての成であるわけです。

ここで述べてきました時間と言いますと、どこまでも「未来」に向かつて有ろう（存在しよう）とする働きと、そうしようとするればするほど否定的にそれを「無」にしようとして働きかけてくる制約としての「過去」の働きを、私たちは、この刹那、刹那に苦しみながらバランスを取り、統合して成って（生きて）いるのです。それが実は、「現在」なのです。

このように私たち人間（精神）の存在構造そのものが、すでに、時間の構造をもっているのです。ここに、人間の存在を哲学的に明らかにしようとするとき、時間論を抜きにしては成り立たない根拠があるのです。

ここで、再び道元に戻ります。

出だしの「いわゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり」ですが、これまで述べてきたことから、明らかかなように、そもそも有時を問題にしようとする時、私たち人間にとって時間（時）は人間精神の存在（有）そのものですし、また、人間精神にとって全ての存在は

時間性を帯びているのです。これが出だしの「時は有であり、有は時である」ということです。

ですから、「丈六金身（じょうろくこんじん）これ時なり」なのです。そして「時なるがゆえに時の莊嚴（しようこん）光明あり」となります。

でも、ここは少し解説がいるように思えます。なぜなら、金色の仏さまが時間であり、時間が莊嚴な光明であるとは、一般的には理解できないからです。

先ほど述べましたように、私たちが最終的に制約し否定するものは、絶対他者と呼べるものでした。実は、それは、自己を肯定しようともがくほど、否定的に働きかけてくるのですが、肯定しようとする自己への執着を捨てるとき、つまり、私たちが、自己肯定から自己否定へと転換するとき、否定的であった絶対他者は、否定の働きから肯定の働きに転換するのです。

そうした転換を成した後に見ますと、絶対他者（時間としては過去）を表す金色の仏さまは自己を無限に支え導いて下さる「莊嚴な光明」となるのです。

次に進みます。「いまの十二時に習学すべし」の十二時ですが、当時は一日十二時間制ですので、一日ということですが、「三頭八臂」は憤怒（ふんぬ）相の不動明王のことです。この仏さまも時であるのは、前と同じです。

でも次の、不動明王は「時なるがゆえに、いまの十二時に一如なるべし」は、また理解が困難な新たな問題と言えます。

問題なのは、一如ということばです。これは、単に現代語訳にあります一体とか、団体同一であるというだけではないように、私には、思えます。金色の仏さまが光明であつたことと同じ意味をもっていると思うのです。絶対他者を、実は、私たちは自分の中に宿しているのですが、それを仏性とか如来蔵とか、あるいは真如と呼びますが、その真如と一体であることを一如と言っているのだと思うのです。時間の根源はこの真如にあるのです。真如の働きがあるから、私たちは時間が問題となっていくのです。

そう考えますと、不動明王が今日の一日（十二時）と一如であるとは、まさに不動明王は時を刻む絶対他者としての真如そのものの現れであるということなのです。

時が金色の仏身であり、時が光明であり、時が憤怒の不動明王である、と道元が言う裏には、こうした論理が潜んでいるのです。

最後の「十二時の長遠短促、いまだ度量せずといへども、これを十二時といふ」ですが、一日がどれほどの長さかを測らなくても、一日は一日である、ということでは

す。

でも、人間が生きる上での精神の働きとしてもつ一日の長さは、その人の精神の成長の度合いやその人がするその時の体験の内容によって変化します。つまり、「長遠短促」があるということです。

何もすることなくぼーと過ごす一日は、その時は長い一日のように感じるかも知れませんが、後で振り返ってみますと、自分の人生に殆ど意味をもたない、無内容なものであるだけに、短く感じます。

一方、大きな事件と呼べるような体験をしますと、その日はあつという間に過ぎますが、その記憶は一生消えません。つまり、その人にとっての「過去」を形成して、後々までも影響をもつことになりまし、その日の事々とても長い一日として思い出すことになるのです。

後の理解に役立つと思えますので、ここには関係が薄いのですが、解脱に至った時の時間のことを述べておきます。解脱しますと、自己と他己が無意識で統合されます。そうなりますと、未来も現在も無くなって、常に現在のみとなり、しかも、何の不安もなくなってくるのです。今が永遠なのです。それは、生死を超越した世界と言えます。有時の目指すものは、実はこうした時間なのです。次回以降、述べていきます。

自作詩短歌等選

権利教育の限界

人権という
権利の教育を
すればするほど
皮肉にも
人は自己に閉じ
ますます
他者に対して
冷淡になる

ケイタイ・ユージン

ケイタイが
気軽な友を
作り出す
すぐにひつつき
すぐに別れる

情けない限り

ワイセツし
こころを病んだ
教員が
史上最高とは
情けなや

多数決原理の危うさ

自らを譲ることを
学んで
多数決原理の
危うさに気付こう

殺すまでやる

争えば
徹底的に
死ぬまでも
相手を攻撃
してしまふ
信じるこころ
失ったあかし

無秩序の制度

無秩序を
生みだす制度
民主主義
自己と他己との
バランス取らねば

個性重視が続きそう

間違いて
個性重視の
価値観を
未だにめざす
人の多きよ

夜寒の街

ホームレス
どんと増えたり
二万人
夜寒の街で
年を越すのか

サービス精神の衰退

現代は
人間関係
希薄になって
サービス精神
だんだん滅ぶ

凡夫の自覚がない

不幸にも
現代人は
自らを
決して凡夫と
思わない
その驕慢が
対立を生む

倫理の喪失時代

経済では
倫理の崩壊を
モラルハザードと
いつている
でも
どんな職業人も
いま
倫理を
失っている

異常が正常

精神を病んでいる人と
ばかり接していると
それが
正常に思えてくる
ということとは
正常なものが
異常に
見えるということ
それは
相対な者の
さだめ

自作随筆選

現代人の子ども観

毎日新聞に「オトコの生きかた」と題して、毎週火曜日に連載記事を書いている精神科医の斉藤学（さとる）氏が、十二月十四日には「子どもへの没頭 駆り立てる『幼稚園』」という見だしで記事を書いていました。

この人の記事にはいつも問題性を感じているのですが、この日の記事も、まさに日本人の精神病理の深さを思わせるもので、驚くと同時に、悲しくなってきました。

同氏は、先日の二歳の幼児を殺した「お受験殺人」についてマスコミからコメントを求められるが、自分には「何がどうなって、ああしたことが起こったか皆目見当もつかないのだが、ただ一つ、これは確かと思えることはある。『幼稚園はなくしたほうがよい』ということである」と述べています。そして、「あれは母親の幼児への没頭を前提にした危険な組織である」としているのです。驚きです。

そして、つづけて衝撃的なことが書いてありました。「2〜3歳あたりが特にそうだが、幼児とは、モンスタ

ーであると同時に、麻薬嗜癖者（しへきしゃ）にとつてのアヘンのようなものである。彼らと24時間、365日接し続けると、どんな大人でもおかしくなる。母親なら大丈夫というものではない。2〜3歳の子供と常時一緒に過ごすのは危険という『注意書き』でも張り出したいくらいである」と。

この方は、精神異常をきたした人とはかなり常時一緒に過ごしていますので、世の中が歪んでみえるのではないかと、思えてきます。十一月号に「子ども虐待」と題する随筆を載せましたが、その中では「犬猫より始末が悪い生き物」という表現が出てきましたが、ここでは「モンスター」とか「麻薬嗜癖者（しへきしゃ）」にとつての「アヘン」とされています。

ある意味で精神的な指導者たる位置にあると考えられる、こうした人たちが、子どもをこんな風に捉えるようになっては、子どもがまともに育つわけがありません。これでは、日本人の皆が皆、自己肥大（他己萎縮）させ、自己に閉じて、自分中心にしか考えられなくなってきた、としか思えません。

なぜか私は、幼児と情動を共有しながら過ごしていますと、何十時間、何百時間一緒にいても、楽しくてしかたありません。

釈尊のごとば（八八）

法句経解説

（二九九）ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒して
いて、昼も夜も常に身体（の真相）を念じている。

この偈は、先月号に続いて「よく覚醒していて」「シ
ーズの一つです。

「よく覚醒」した状態とはどんな状態かについては、
先月号をご覧頂きたいと思います。

仏弟子はよく覚醒していて、「夜も昼も常に身体の真
実を念じている」とは、一体、どんなことなのでしょう
か。「身体の真実」という言い方が普通ではありません
ので、直ぐにぴんとこないかもしれません。

身体の実とは、私が言う「からだ」の戒律を守るこ
とです。からだとは心理学用語でいいますと「感覚・運
動」の働きです。それは「行い」として現れます。十善
戒で言いますと、不殺生、不偷盗、不邪淫の三つ
の戒律を守ることです。

何度も書いてきましたが、不殺生戒には、ガンジ
ーやキング牧師で有名になりました「無暴力」も入ります。
現在、イデオロギーによる暴力革命は影をひそめました

が、代わって世界の方々に民族や宗教の違いによる争い
が耐えられません。その多くは、暴力や殺人を伴っています。
釈尊が二千五百年前に説かれた絶対な教えが、未だに守
られていません。過ぎ去った二十世紀を反省してみても、
それが大量殺人を伴う戦争の世紀であったと言われてい
ます。この反省が、今後に生きることを念じざるをえま
せん。

の不偷盗戒ですが、現在、だんだん守れなくなつて
きています。主婦や子どもたちによるスーパーでの万引
きは、一定の万引き率を設定して、価格に上乗せするま
でになっています。また、就学前の幼児の段階から、平
気で友だちのものを持つていく子がいるようです。

の不邪淫戒ですが、これは、まさに戒律なのかどう
かさえが問われるまでになっています。何度も書きまし
たが、フィリピンの売春婦（若年）の客の九五%が日本
人だと聞いて、驚きです。売春ツアーに出掛けるのは日
本人だけなのではないでしょうか。よその国では、もつ
とフリーセックスが進んでいたり、売春婦制度があつた
りして、外国に行つてまで買春するほど飢えていないの
かもしれません。

どちらにしても、この「からだ」で守る戒律は犯せば
外からすぐ分かりますので、現代人の規範性喪失を如実

に示すものになっていきます。この戒律が現代人にとって極めて切実なものになっていると言えます。

(二〇〇) ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、その心は昼も夜も不障害を楽しんでいる。

つづいて、「よく覚醒していて」、「その心が昼も夜も不障害を楽しんでいる」ということです。

「不障害を楽しむ」とは、一つ前の偈で述べました不殺生戒に含まれるものです。でも、この不障害には、ことばの暴力も含まれるのではないでしょうが。

人間は、身体に受けた傷は、その傷が癒えますと、もう痛みはなくなつて、傷を受けたことさえ忘れてしまします。でも、こころに受けた傷は、なかなか癒えませんが。一生に渡つて思い出すだけで、こころが痛むものではないかと思ふことは、自分が相手にこころの傷を与えたのではないかと思ふ事態でも同じことだということです。自分が言ったことばが深く他者を傷つけたのではないかと思ふような記憶は、なかなか消えませんが。いつまでも、あいつまないことをしたという思いで、こころが痛むものです。

こう考えますと、この偈は、自分が傷つくことだけで

はなくて、他者のこころをも傷つけないことを、楽しんでいふと言つていふように、私には思えます。

現代人は、自己に閉じて、自分が傷つくことしか考えない傾向が強いのですが、人間としての完成には、相手を傷つけない配慮が必要なのです。

いま、もっとも親密な人間関係だと考えられる母子関係においてさえ、子のこころを深く傷つけることばが、傷つけたと気付かないで、母親から吐かれています。

仏教には、和顔愛語(わけんあいご)や戒語(かいご)ということばがあります。

いつだったか、良寛さんの戒語のことを取り上げたことがありました。もういちどこで復習しておきたいと思ひます。

良寛さんは、次のようなことばを言つてはならない、として戒めています。大変多いのですが、ここでは、紙数の許す範囲で、選択的に示しておきます。皆さんも、心掛けられてはいかがでしょうが。

「ことばのおほき ことばのたがふ ものいひのことごとしき ものいひのくどき おのがいぢをいひとほすてがらばなし 人のことばをわらふ 人のかくすことをいふ 人にへつろうこと 人をあなどること はらたてる時ことはりをいふ にくき心もちて人をしかる」

後記

一、早々に年賀状を頂いた方に、紙面をお借りしてお礼申し上げます。どなたさまにも、私からは年賀状を差し上げることを失礼しております。お許しください。

二、新しい次の世紀の始まりにふさわしいのか、今年は、なんだか温かい正月だったように思います。皆のこころも温かくなればいいのですが。

三、今回から始まりました、道元の時間論・「有時」は、難しかったでしょうか。なんせ今までに理解できた人がなかったほどですから。辛抱して読んで頂ければ、得るところが必ずあると思います。何度も何度も読み直してみて頂きたいと思います。

四、私が、得度して修行し、伝法灌頂を受けたのが平成元年でした。弘法大師の有り難いご縁を頂き、この上ない「大楽」を得ることができました。後は、この喜び・充実感を一人でも多くの人に味わって頂けるように尽くすこと以外に私の生きる意味はないと思います、翌年の平成二年から『こころのとも』を発行しはじめました。それと同時に、毎日、自分の考えたことや感じたことを人さまのために残しておきたいと思い、詩や短歌や随筆などを一日一つ以上作ることを始めました。書いた詩などのファイルは年三冊で三十冊書棚に並んでいます。

五、昨年で十年が過ぎ、一つの区切りになったように思えます。今年は、新たな十年の始まりとなります。したがって、『こころのとも』も十一巻が始まります。

六、私たち、有限で相対的な存在者は、かならず消滅する運命を背負っています。ですから、この地球も必ず消滅するのですが、でも、いま世界中で、人間が自らの手で滅亡へと急速に押しやっているように思えます。滅亡することを「覚悟」している人がどんどん増えて、そうなるのは何も不幸ではありません。でも、現代人のように自己を追求することだけを生き甲斐としている人にとっては、これほど不幸なことはないのですが。

月刊 こころのとも 第十一巻 一月号 (通巻 一一一號)	平成十二年一月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしと</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

